うとふ

安方忠義傳

前編下帙四冊

巻之三

へ 13
3237
7

ごとく。半夜油尽たれバ燈火似なりて

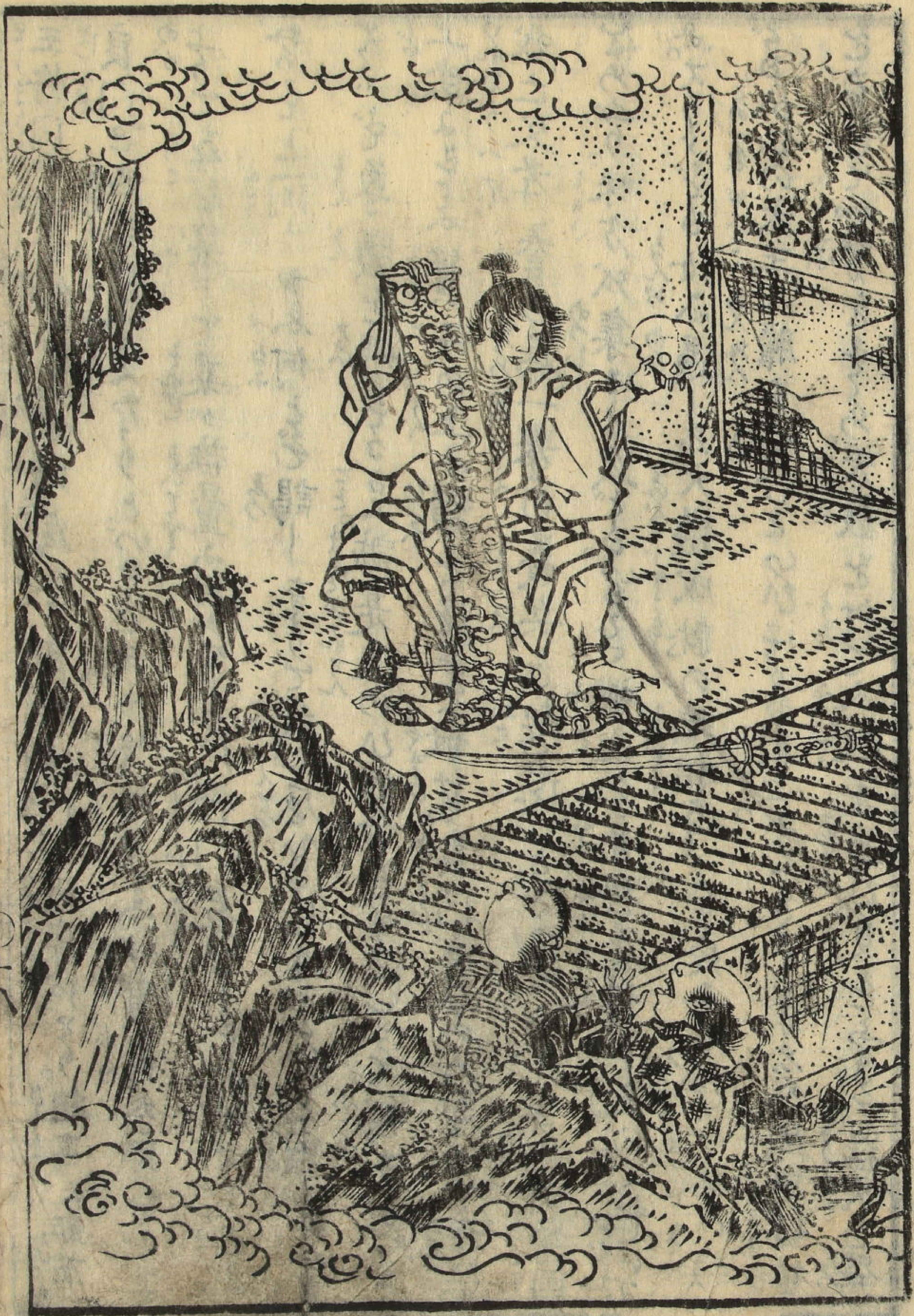
第十五條

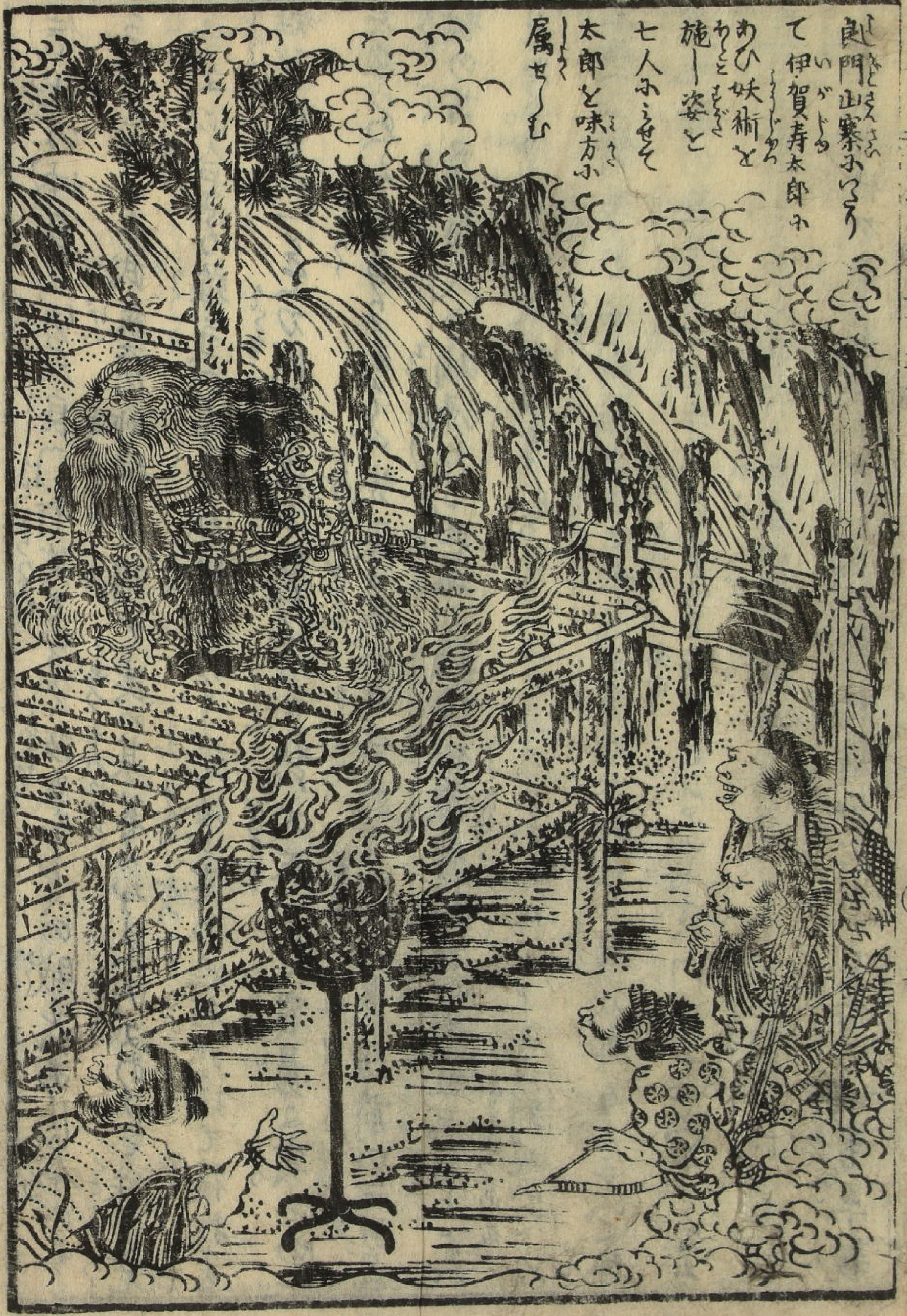
かくてかの賊。良門が襟首をほりて。刀をとるて手はなして。己をむかふさまを斬ぶらんとする所に。良門たちまち起上り。一声呼とさけびてかの縄をふりときて。いそがしく足を飛して。かの賊を蹴倒し。刀を奪取て。首をまつしと打落しければ。さしもにくき大口ひらきしも只あはれなるなり。良門たちまち刀をふりひて。簀子の上にかけ上り。大王を目がけて斬はられば。大王鉄の燭臺をもちてまじとうけとめ。そのひまに大太刀抜て相むかひ。丁々とうちむすぶ。両人の剣術法にかなひ一来一往一去一回秘術を尽し。火花を散し。戦已に五十余合におよぶといへども。いまだ雌雄を決せず。勢ひ互に猛烈なり。大王ハ身の

緑亀館文庫

へ 13
3237
7
昭和十年七月九日
購求

たけ遥にたかく。左右の腕をうちはなちて老松に蔦葛の巻はへたる如くなるに力毛あつく生しげりて。金剛力士のあれたらんハかくぞあらめと思はれたる。良門ハあまたくの身材なれバ立ならびたる為体。猛鷹にむかふ羊のごとく。荒鷲の前の燕に似ていとあやうけなれども力量武藝に久しくきたへられたる身や。大王の剣法をしたしく乱しけれバ。なる身飛しさりやれしバらく待玉へ敵対せず証拠ハかくのごとくなりといひて良門が目さきへ太刀をなげ出しけれバ良門も手ばなしてひれふしたり。大王恭しくいひけるハ。某されバなりとも君の容貌を見奉りて。たゞ人ならずと思ひし故わざと无礼を行て試しけるに。果て心気のおよばざる剣法の神妙。凡人の所為にあらずと。あふぎ願くハ。御姓名をあかし玉へかしと誠に信伏の体なりければ良門打笑ていはく汝もなみなみの賊ハおよばじ今のさまふれを見るに武藝の妙所を得て実ハ某等がおよぶ所にあらず。殊更老年に似合ざる強気のふるまひ怪むべし。先汝が実の姓名を聞て後我素姓をなのらんとて刀を背後になげやりたれバ。大王いはく。容易に実をあかさぬハ武士の理なり。しからバ先某が名を名告べし。某ハ是房前の三男眞楯の苗裔藤氏の嫡流たる。西海の猛将伊豫掾純友の股肱耳目とよバれたる。伊賀寿太郎がなれるはてにて此立山の地獄と申ハ則此山つゞきに住バ綽号を活閻羅大王と称じ。三角眼太郎囘て鼻次郎などをすべて陰司地府の称号を以て手下の者にも名告せしといふ。良門聞もあへず扨ハ天下にその名ひゞきたる。西海の豪傑にておはしけるか。今ハ何をかつゝむべき。人王五十代の帝。桓武天皇五代の曽孫。前将軍平良将の嫡男。平親




飢門山寨にありて伊賀寿太郎に
あひ妖術を施し姿と
七人にみせて
太郎を味方に
属せしむ

王将門が一子。幼名平太郎。為人て良将将門の両字を取り。相馬太郎平
良門と名告ハ我事なりと。いまだ云も終らざるに。伊賀寿太郎をどりて
上りて歓び呆して某が推量にたがはざりし。将門君のおとしだね。世に
出まを聞し召給何とぞ謂ありて我心底をしらさえんと願しに今日
まのあたり尊顔を拝する事誠是天の引合せならんとて褥をゆづりて
上坐にすゑまゐらせ簀子の上に額をすりつけて敬ける良門もなのめならず歓び。
我亡父孝養の為一挙の義兵を起さんと。ひそかに爪牙を扮して諸国
をめぐり。味方を集るといへども。いまだ補佐の良将を得ず夫のみ愁ける
に。幸なるかな汝に遇し大儀成就の瑞相なりとはいへど汝が下手の賊
ども。此山の大王人膽を好むといひける由心にくゝおもひ。殊更鮪節
をなじして加勢をせしめ。大鼓を打て人数を退け貝をふきて猛火を発

し穴に掛とし又笛をならして人数を集る號令おのづから法則ありと
みる。然らバ大王と称せらるゝはたゞものにあらずと察し。見参して味方につけん
と設しけるを捕えてこゝに来りぬ我肉芝仙といふ異人にあひ天
竺蝦蟇仙の傳法蝦蟇の妖術を学び霧を起し雨をよび。兵を
辟自縛を解の術を得たれバたとへ阱に落ち入るもいかでか脱ざら
んや我術の妙を見せまゐらすべしといひて手に印をむすび。口に呪文を
となふるとひとしく。良門が姿七人となり。いづれを假の姿いづれを真の
姿と辨じがたし。やゝありて六人の假の姿ハ尽くきえ失ければ。伊賀
寿を始。衆賊らが。呀と感る声しばしハ止ざりけるが。良門やがて首
にかけたる袋のうちより。大政官の印。錦の旗。将門が髑髏。三ツ
の物を取出してみせければ。伊賀寿これを拝覧し。此官印は

そのうゝ某尊得て将門君にさゝげたるが時いたりて再びかゝる奇しき奇
妙の術を得たまふうへに。官印御旗あるゆへ。味方を集る便十分なれ
将門君陣中にて影武者をたくはへたまひ。御姿を七人にみせたまひ
いづれも鬼神をあざむく猛将の本懐もとげたまへど。かく白骨となり
たまふのみ一さまに冥途に於てもさぞ口をしく恨みんぞ。不覚の涙
をおとしけるが。おくまで強気の者なれども。さすがに老の癖なるべし伊賀
寿かさねてのべけるは。思ひ出せし昔語ごとあげけるぞ御聞くされ
かし。某先は去る延喜年中。伊勢国鈴鹿山にて亡たる山賊の頭領
伊賀寿丸が孫なるぞ。祖父亡て後伊賀寿太郎と名告。弟は伊賀寿次郎
とやうし。兄弟ともに播磨国に住て。山陽山陰両道の海賊等を手に
付け。頗威をふるひけるぬ。去る承平二年将門君と純友殿

合体し。東西にわかれて兵を起し玉ふ折から我々兄弟純友どのゝ味
方にありし度々の合戦に粉骨して尽したりしが弟次郎八黒崎合
戦の剣に打死し。純友どの御一門ことごとく亡ひたまひぬれば漸々
にたのみもうけなくなり。純友どのゝ容に某をめしておほせけるは我運命
も最早尽たり末子重太丸幼年なればこそ幸なれ。汝打死とゞまりて
生残り。重太丸をもりたてゝ再軍をおこし我本懐をとげさせよと。あらん
冥途にありても。いかなる遺恨をもはらすべしと。かれぐれのむねと涙ながらに
命じたまふにより。博多の船軍の折から目ざましく戦して敵の眼をくら
ませ若狭国の住人神沢弥九郎照定篠田孫五郎利宗といふ両人の
敵を小股にかきこみ汝等我死出の旅路のともせよなんど戯れて海
中に飛入某曽て水練に達し。海上を陸地のごとくおよぎえゆゑ水底

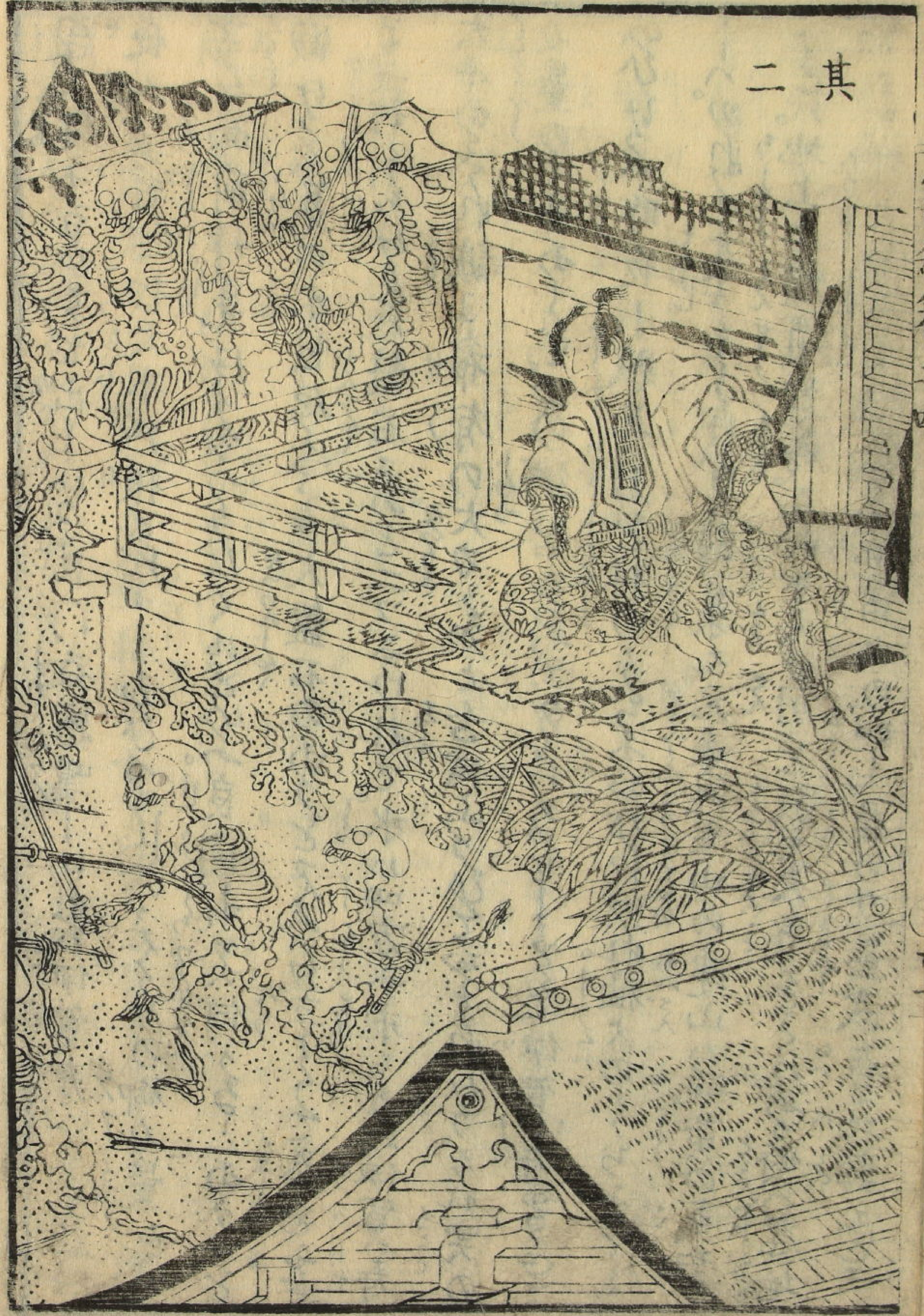
大宅太郎光国相馬内裏の舊御所に入りて妖怪を試む

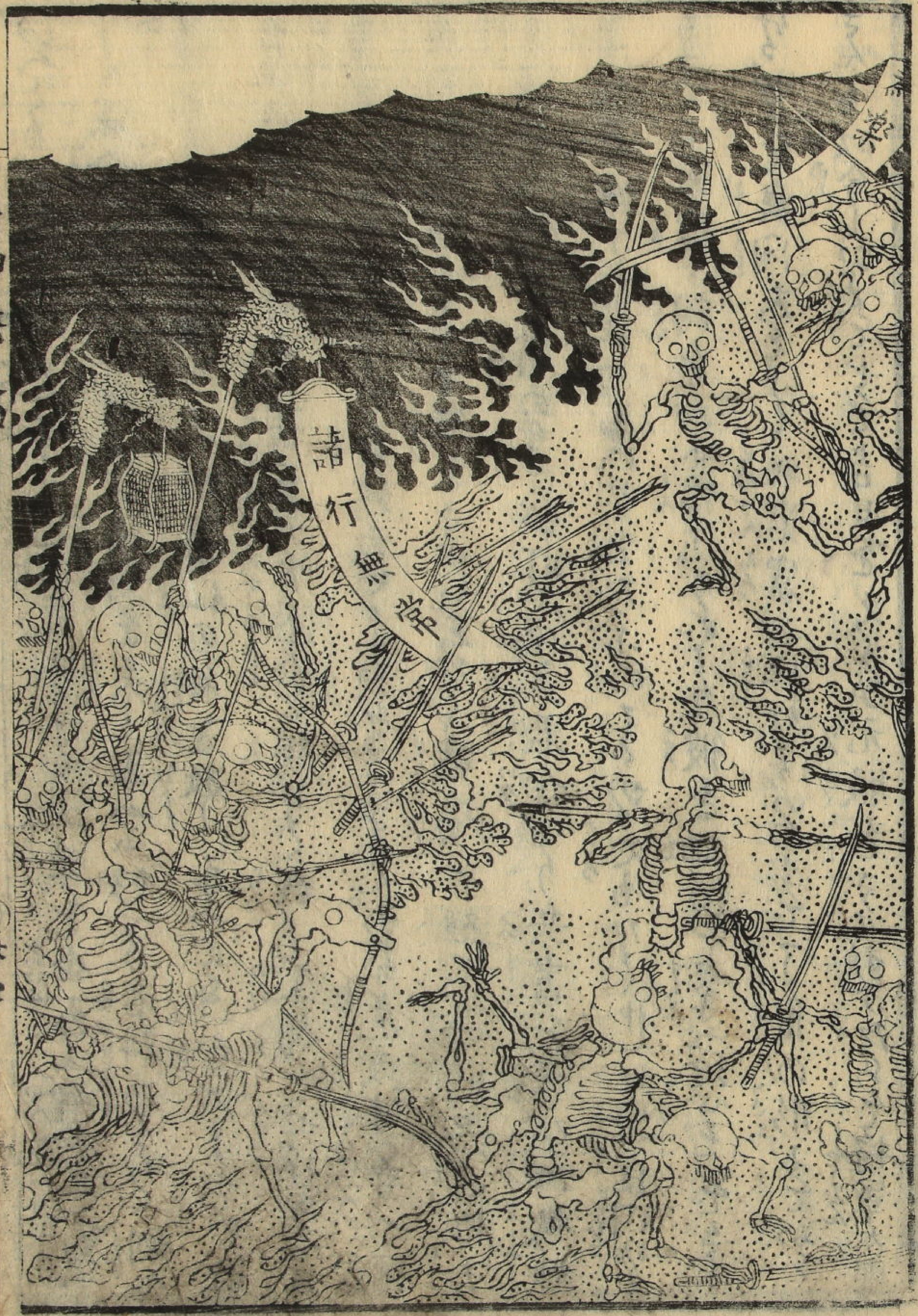
をくゞりて一命をたすけられ我をとらへて軍の様子をうかゞひなるに純友どの
は重太丸どのを具して伊豫国三津の濱まで落行給ひ。お国の警
固に居ける橘の遠保といふ者の為に父子ともに生捕給ひぬ。此日は是
天慶四年六月十日なりき。純友どのは深手をおひてその夜のうちに
逝去し給ひ。重太丸どのは京にひかれ。六條河原にて斬られ給ひぬ。こゝに於て
純友どのゝ遺命も某が存念もみな水の泡となり。已に腹かきやぶらんとて。
主君の死路に追つかんと存ぜしが。まてしばし一旦敵をあざむきて打死と
みせしたるこそ幸なれ。権をもつて再味方を集て兵を起し。主君の
とふらひ軍せんと心を決し。此山中にかくれ住。已に今一千餘人の味方を集め
ぬれども時いたらずして軍を起さず。たゞ味方をまさんと大膽を好むゆゑ
ことさらに大膽強気の者をえらみこゝろみにとらへしめて試るに。一人として真の
大丈夫におはさず。おのれとても老の身なるが。かくてはとても本望はとげ
がたしと一向これを愁居たる折しも。ゆくりなく君にあひ奉ること。ひとへにかふせの
ごとく大望成就の瑞相なるべしと語て。轉よろこびにたへず。小賊に命じ一合
の唐櫃を取出さしめて良門が面前におき。これはこれ純友どのゝ秘蔵
せられし藤丸といふ鎧なるが。某が軍功を賞じてたまはりたるを今にいたりて
所持侍りぬとて。とり出して見せられば。良門これを一着し。昔をしのび旧
物ながら純友の形見の鎧と亡父の髑髏をかくならべおきて我と汝と会
盟をなさば両将ふたゝび此世に生れ出でしも同然なるぞやといひければ伊
賀寿はいとゞ喜び。小賊に命じて俄に酒宴をまうけ。時いたるまで
御身をかしづき給ふ。此心底所究竟之今より此山寨の頭領を君にゆづり。我は
不肖なりといへども某補佐しまゐらせて大儀をとげさせ申さんとて。首

にそなへし兎と山鳥をさゝげて。長柄の熱酒に血をそゝぎ。
唐土春秋の会盟は牛の血をそゝりて金鉄の誓をなせし
金烏玉兎の日月を以て誓とせるは。かの牛血にもまさるべし殊更上
ハ藤家の氏神春日の神供之鳥ハさながら熊野の使者牛王起請
の根本なればなりとや。さて大杯になみて互にこれをくみかはし。おなじく手
下をよび出して良門を拝させ。残酒を与へて飲しめけるうち。夜ハふかく
とありけるが。なを酒宴おはりしを。良門伊賀寿が年齢をとひけるに
七十一歳とこたふ。その年高して力量の衰ざるを感じければ伊賀寿
酔に乗じていひけるハ昔若かりしころハ千万騎の官軍も物の数とせ
ざりしが。年老たるからハいさゝか矢猛心もうせて。力量もたるゝに減じなる
様におぼえはべれどゝおぼつかなしといひつゝ大なる銅の燭臺を二ツならべて

置て縄にあひてぞ出しける。良門益感嘆しければ。伊賀寿いはく。君
夜人つぶてを打大木を根こぎにしたまひつるはじ。いさゝかの御力量おはしま
せらん面前拝見はべりたく候との。良門打笑何がなとあたりを
顧けるが。筧の水をたゝへたる大盤石のあるをみつけ。立よりて拳をにぎ
り。一打うちければ。盤石さつと二ツにわれて。水ハ四方に飛ちりぬ。伊賀寿
大にあきれ。誠に希有の大力なりと舌をふるひておそれけり。これ実の
力量のみにあらず。かの術を行ひてかくはなせしとぞ。伊賀寿かさねて
いひけるハ。昨夜小賊等君を林のうちにおびきいれ猛火のうちにつゝ
しへかれて某がまうけおく計策之。元来此立山の連山ハ硫黄の気ありて
けれども。地上に焔消を蒔。これに火箭を放て火気をくゆらする時ハ忽地
下より烈火を生じ。いろいろの地雷火の如し。君の力量武藝比類なしと

其二





いへども。さすが御若年とて血気にまかせ。大儀を企たまふ御身までかろ〴〵しく深入したまひしは。進退の法則を失したまふに似たり若輩のうちに剣の菱をとらるゝなれば君たとへ蝦蟇仙の術を放したまふとも。一命はまぬかれたまふべからず。畢竟某真の大丈夫を得まく欲し。生捕を好むゆゑに菱をとらるゝなれど幸にして君はあやまちなかりつるぞ。あな危哉某曽て孫呉の術武経七書に眼をさらし。数多く戦場を経て進退懸引の法則。よろしく得る所あり。こひねがはくは君今より兵書を学び。神機妙算の奥儀をきはめたまふべしと。なにのさはる処もなかりしければ良門はもさらばとて彼が詞を大に信じ。それより彼を師として学ぶべき心ぞさだめにけるが。かくて良門はなほ此岩窟に住けるが。いつまで丫角の形にておはさんも似合しからずとて吉日をえらび元服をさせまゐらせて将軍太郎

と名告せけるに伊賀寿いひけるは将門君在世におはせし時ならば冠はそれがしの大臣。理髪はそれがしの納言なんど元服の儀式もおごそかに行はるべきにかゝる山寨にて何の礼儀もなく元服したまふはさぞ本意なく思召されんさりながら。つひには袞竜の御衣の袖をひるがへして百官の朝賀をうけたまふ御身と成たまはん。心を長くまちたまへとの給へば良門はさぶらふによろこび。末たのもしくぞおぼえける。是よりしてのちは楯を矯せ弓を削せ合戦の営の外他事なく小賊等を敵味方に分ち良門伊賀寿両大将となりて合戦のかけひきを調練し時の至るを待てあまたの月日をおくりけるとぞ

衣衣山　第十六條

夫は扨おき爰に又大宅太郎光国は武者修行にことよせて近国をめぐり

妻唐衣が。ひよ陰の太郎のゆくゑを尋るに更にその在所をしらざれば心中大に愁て。ほひに陸奥のそとまでたづね行けるが。下総国より下りし人の物語とて。このごろ相馬内裏の跡に妖怪住て人民おそれてそのあたりに近づく人もなし。いかさま将門殿一門の怨魂の所為なるべしときゝしといふ。光国これを聞おもむけやありけん道を急ぎてかり来りたゞちに下総の国にいたり。相馬郡にちかづきて妖怪の実否をさぐらんとおもふにあたり辺すべて戦場の跡なれば一軒の人家もなく道行人もまれなれば物とふべき便もなし。折しも小雨ふり出し。ねぐらにかへる濡燕の飛ぶを見て我も旅路に行暮て。ねぐらもさだめぬ身なり。かの燕は雌雄打連たれど我ハさるものゝ妻もなしと愁を催し。傍の木蔭に雨を避て居たる所に。むかひの方より山賊とおぼしき男頭に柿色の頭巾

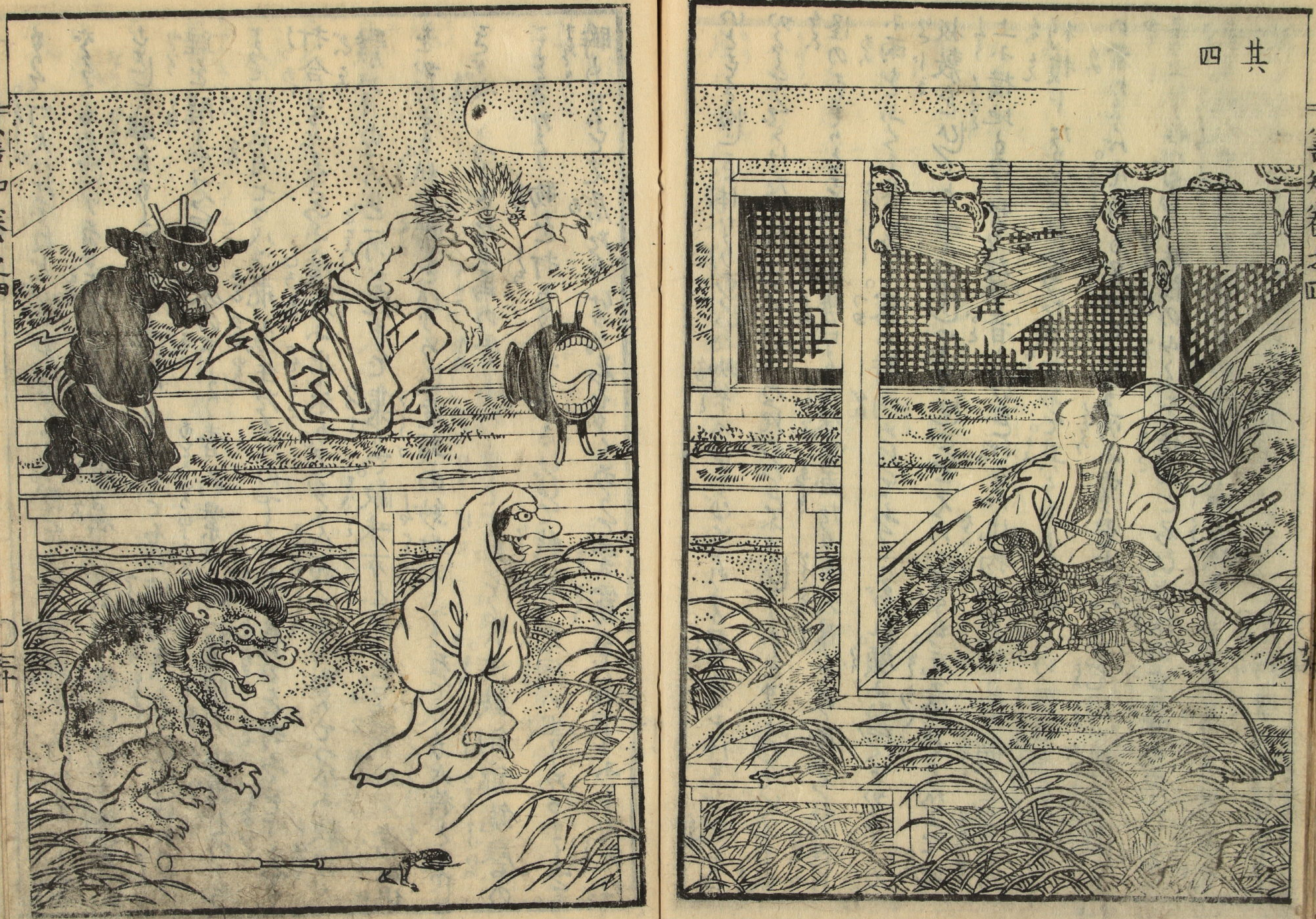
をかぶり。針目衣の短きを着て。ほそき木太刀を腰にさし。袖まくりして来たるが。これもおなじ木蔭に立よりて雨やどりしを光国さいはひと相馬内裏妖怪の実否をたづねけるに山賊こたへけるハ旧御所の妖怪虚説にあらず。去る天慶三年二月十四日。将門殿一門残らず亡たまひ。新内裏兵火の為に焼亡てわづかに乾の隅の七八ヶ所方二町ばかりの所焼残りてありけるが。官兵も将門殿の猛威をおそれおもふ霊の祟をおそれて。とりちら捨もせず。その侭おきて誰ひとり手をつくる者もなく。唯崩るゝにまかして今にあり。焼亡の地ハ莽々たる草むらとなり。一ツの不思議といふハ。冬も草の枯るといふ事なく。四季の草花常に咲乱れて中にも桔梗の花のみ咲ざる事なし。その所を今桔梗が原とぞいふとかや（桔梗の花咲ざるいはれ後編に詳なり）戦死の人の屍ハ後山にうづみ。其所を今将門山と名づけはんべるなるに

其二

近ごろかの頽れたる古御所に妖怪住。異類異形のものあらはるゝによりて。人おそれて近よらねど。おのれは将門殿一門戦死の人々の亡魂なるべし。ちかごろは武者修行なんどいひ罵り武勇にほこる者おほく。かの妖怪の沙汰を聞およびためしみんとてかしこにいたる者あまたあれども。つひに妖怪をみんとつけて生てかへりたる者を聞ず。太刀刀はおろか横たへたれども真の大丈夫はまれなるにやといひて。光国が打扮かへて。これよりしのびてみんとも刀をおびあひつるに。光礼のことばをきゝしツといひて。ともにゆかんといへるを光国よびとゞめ。かの古内裏へ行道はいづれぞととひければ。山賤その道をさし出へて足ばやに走り出けれバ。光国は妖怪をたいぢせんとおもふ心ありてありけれバ日のくるゝにもかまはず山賤がをしへたるかたへ行けるにかれがいひしにたがはず四方茫々と蕩々として。かざりもあれど。比しも春のなかばなるに百花の時

のごとく。草深く生茂りて。露濃なる野原之此時しも野寺の鐘入相を告て日もはや西に沈雨雲はおちかゝるばかりに暗きをりに風騒こと乱草の上を吹渡りていとさむし。ここらも人の往来たえたるとみえて道とおぼしき方もなければ高く生たる草を踏分つゝゆくに。かの旧御所はいづれの方にあるや東西だに辨せざれバ其便を得ず。こはいかにとあきれつゝ立とゞまりて思案に頭の上に鵬ことなりひゞく声を打あふぎみて雲間の星の光にすかせば鞠のやうなる白き物空をひらくと飛ならば。光国おもふにこれぞまさしく妖怪の所為なるべし彼物のゆく方を目あてにおひてみんずやとやにはにはせてあとを走りみ走りゆけばかくて一里ばかりも来つらんとおもふころ。雨雲はれて月の夜にあらはれたる影玲瓏としていふばかりなく隈もなくこの辺をみるに草むらのうちに四ツ足門の礎の跡ありて空堀は繁れる木の葉にうづめり。築墻のくずれたる

跡あどもみへざれバ。新内裏焼亡の旧地なる事疑ひなし。其の白き物をよく見れバ
一ツの髑髏にて。あまた飛出てあるが木むら茂く立さらぬたるうちにおちぬ
さてハかしこそ妖怪のすミかなれと。いそがしく走行てみれバ。果して此所古
御所なり。細にその為体をみるにいづれも焼残りたる所とてハ。松とも
柏ともつかぬ木どもの皆焼てたちがれてあるに蔦かづらまとひまとひて黒竜の臥
たるに異ならず。唐搏風の四ツ足門半焼残りたるが。軒かたむき瓦尾おち桁梁
朽くち。今もたふるゝかと危体之一連の地草蔓こと生茂れるなかに太刀刀
の折たる鏃のさびてなる。人の骨の去らぐとしたるなど。打交りてちりみだれ
こゝに奥深くたてつらねたる宮殿あなどこれも崩かゝりてあやうげなり。殿
上にのぼりてみるに折戸たふれ蔀破れ壁おち床ぬけて葎むぐらおひみだれ
塵ハ一寸たかくつもり。燕の巣ひきちらしたるなかに狐兎の足跡のミありて
いとすさまじき体なり。あるひハ蜘糸がむすびてやれたる翠簾をつゞり棘おひ
かゝりてやぶれたる障子がたふれたるあり。ふすまハさびしうあれまどひて。いふも妖
怪のすみかとおぼえし形勢なり。藻を画たる合天井をあふげバ。朽目
に雨をふくみ苔蒸て露ハ時雨のごとくこぼれ顔にひやひやとかゝりぬ。
板敷をひしひしとふミならして巡ればところどころ垂木落ちなどして地
上に撲地ものおちたる音しけれバ。さてハ化物ござんなれと顧ミれバ天井の
朽損じたるがぬけおちたる音にぞ。其うちより類百の蝙蝠飛去ぬなどし
の者ならバ片時も足をとゞむる所にあらざるといへども。光国ハ膽気烈しき
勇士なれバ。あらく妖怪の出るを待んとおもひ。大紋の古畳のあるをとりて
来り。殿の中央にしきてその上に坐し。四方をみるにこゝぞ居るものりけれ湿気
深く冷やかなる風床の下より吹あげ。きらしれ月影壁のくばみよりも


其四

ありて。灯火ハきえねども。ものとおそろしかりければ。しばらく時をうつしけれども露
ばかりもおそれげなる事なければ大に退屈し。おもはず握けなる拳をゆるめ。
まさしく睡をもよほしけるに。一間ばかりへだちてかの暗所東ゝとひゞきけれバ。光国
睡を醒しておきあがる。床の下より青色紫のいろしたる陰火燃出。そのうち
より髑髏七ツ八ツ飛出。生たる人のやうに太刀長刀を打ふりて丁ゝと
打合けるが。しばらくに廣庭に出来り。又おほく人類おほくありてつひに數百の
髑髏あつまりし一所まで集りて敵味方とわかれ。涅槃経无常の偈
をとなへる。紙の幡をひらめかし。竜頭の紗灯をおしたて双方大将とおぼし
き。全くつゞきたる馬の骨に打乗て下知をすれば。法鼓銅鑼鐃磬の
ごときなり物を打ならし。おめきさけびて戦ける。光国ハ坐したるまゝにて
瞬もせずして居たりけるが。しばらくありて雲霧などのやうにきえ失ぬ。

光国本意なくおもひ我おもふに妖魔邪神のたぐひならバ生捕にして世の人の
睡を醒させんとおもひつるに今の様子にてハ戦死の人の魂魄其気散ぜ
ずしてこゝにとゞまり。修羅の体相をあらはすものとおもふにあやしむにたらず。迷
魂を慰さめんハ僧徒の會る所にして武人のかゝる事にあづかるべきにあらずと
足をはこびしところにとゞまりつゝあれバ。ねのけさほどに何ぞ奥ある化物出よかし
とおもひけるに。程なく仏間とおぼしき所に。鉦打ならし異口同音に念仏
をとなふる声きこえければ。やがて身を起し彼所におもむいてうかゞひ見るに老
若男女の幽霊。血なまぐさげなる斬首に珠数つまぐりなして百万遍といふの
ことを仕する体なり。光国呵々と打笑。怨魂の集るに乗じて狐狸など
の戯るゝか。さもあれおそろしげなる化ざまよといひつゝ手ごろの石をとつ
て。大勢の中へ撲地と投つけたりしかバ。皆同音に呀と泣さけびてきえ失

其五

忽家鳴震動して異類異形の化物あらはれ出ぬ。青鬼の両腕あるが頭
に鉄束のやうなるものをかぶりたるもあり。黒くして牛鬼のごとく頭に金の
針のやうなる毛の生茂りたるが口より火炎をふきて飛出るもあり。或ハ
頭に剣のやうなる角いくつとなく生出。紫角鷙鳥のごとくなるが裸身に緋
袴をきたるもあり。或ハ角さきに目口生じ。手杵に四足生じたるなど追々
椽の上にねり出たるも。光国ハ彼奴原何をするやらんと柱によりかゝりて居
たりける。是等もやがてきえ失ける后とおぼしき所の破れたる
壁のさけめより。さしのぞきてみれば丈なる黒髪をふり乱し。眉
太く色青ざめて痩おとろへたる女房。鉄漿の器をとり散して鏡に
むかひ。歯を染る体なり。よく見てければ鏡ハ女の童とおぼしきもの
顔をぞあらはしたる。かくおそろしき化物いくつ出たりとも手にたらずと
罵を聞つけて小部の格子の間毎に目口鼻いでゝそげらげらと笑ひ
にこゝえうせぬ。光国ハあまり猛き化物もいづるぞと四方に眼をくばり
てぞ居たりける

善知傳巻之四終